

に、多くの方々の協力を得て、深海に至る海産種はもとより、空白に等しい池沼や内陸貝についてまで、より詳細な調査を継続せねばならぬ。

(千葉県松戸市立第一中学校教諭)

### 引用文献

石川政治 (1969) VENUS. Vol28. No1. 日本貝類学会

内田 享編 (1965) 新日本動物図鑑〔中〕 北隆館

奥谷喬司共著 (1967) 原色自然の手帖日本の貝講談社

木村泰治 (1982) 理科教育研究123号、千葉県教育センター

吉良哲明 (1959) 原色日本貝類図鑑、保育社  
十勝の自然史研究会編 (1983) 十勝の自然を歩く、北海道大学図書刊行会

波部忠重 (1967) 続原色日本貝類図鑑、保育社  
—— (1968) 日本の貝、保育社

—— 共著 (1965) 原色世界貝類図鑑Vol. 1. 保育社

—— (1967) 標準原色図鑑3貝、保育社

—— (1983) 貝I、II、学習研究社  
増田孝一郎共著 (1969) VENUS. Vol28. No2 日本貝類学会

和歌山満 (1987) 浦幌町郷土博物館報告第29号、浦幌町郷土博物館

## 斎藤米太郎と考古学

### 後藤秀彦

斎藤米太郎は浦幌町が生んだ考古学者である。氏は、1908（明治41）年1月2日、北海道十勝郡浦幌村字下浦幌西1線北12番地（現・浦幌市街）に生を受けた。この時期の浦幌町は、1900（明治33）年に生剛外二ヶ村戸長役場を設置して行政的に独立し、さらに1903（明治36）年の根室本線の開通と浦幌駅の開業に伴い役場を浦幌市街に移転するとともに、1906（明治39）年4月1日には二級村制の施行に伴い「生剛村」となった直後であった。したがって、浦幌市街地は本格的な市街地づくりに着手したばかりの一面の湿地帯であったという。

嚴父は、小規模の畠地を自宅周辺で耕作していたらしいが、村内では「水汲みサイトウ」の名で呼ばれていた。それは、十勝川の一支流浦幌川流域の低湿地帯に形成された浦幌市街は、良質の飲用水に乏しく、住民の多数はわずかに良質の水を得られる現・浦幌神社脇の湧水に頼っていたからにほかならない。やがて、米太郎の父は一杯いくらで水を運搬することによって日々の生計を立てようになったようである。

古老の中には現在でも「水汲みサイトウ」の名で呼ぶ者は多い。

米太郎は1922（大正11）年、地元の十勝郡第二

浦幌尋常小学校（現・浦幌町立浦幌小学校）高等科第一学年を修了すると東京へ遊學し、私立大成中学校へ入学、1925（大正14）年3月、そこを第三学年で中退した。

その後の数年間の動向は不明である。

浦幌町立十勝小学校に保管されている米太郎の履歴書には、昭和12年8月25日「十勝郡大勝尋常小学校代用教員ヲ命ス月俸五拾円給與」とある。しかし、これより先、米太郎の著書『郷土先史民族砦趾』には昭和10年3月の日付けで「十勝郡大津村静内尋常小学校」とあり、本文中にも「昭九調」との記載が見られ、そのうちで最も早いものが「昭九・九・二五調」であることから、この時期には既に静内尋常小学校の代用教員として勤務していたものと思われる。その後、前述のように大勝尋常小学校へ転勤し、1937（昭和12）年10月には小学校准教員免許を、翌年9月には尋常小学校本科正教員免許を講習によって取得している。

なお、この履歴書では旧氏名を「渡辺米太郎」と、一時期母方の姓を名乗っていたことをうかがわせる記事があるほか、氏名のふりがなには「サイドウ」とあり濁音であることも知ることができる。

米太郎が歴史学、とりわけ考古学に関心をもつ

ようになつたのは立正大学や東洋大学に学んだことに起因している。特に、立正大学では後に同大学文学部教授となる久保常晴（仏教考古学）が1歳年上の同年代ということもあり、また釧路出身の同郷という縁もあって深いつきあいとなり、後に米太郎を日本考古学協会員にも推薦している。

こうしたこともあり、1934（昭和9）年、『大津村史』の編集に加わった米太郎は、当時の大津村域及び周辺の浦幌村・豊頃村をはじめ十勝管内各地において遺跡の分布調査を敢行し、大きな成果を収めた。この『大津村史』は脱稿したが刊本とはならず、稿本は現在、豊頃町教育委員会が保管しており、筆写した稿本が帶広市図書館に所蔵されている。この稿本に図版はつけられていないが、先史部門・チャシ部門にページを大きく裂き当時としては稀に見る編集内容となっている。

この当時、米太郎と行動をともにしていたのは地元では医者の中村茂、教員の編田久次郎、豊頃の長谷川長、大津の若林三郎ら、帶広では永くアイヌ子弟の教育に尽力した吉田巖ら、そして教導をえたのは北海道帝国大学の高倉新一郎らで、1935（昭和10）年に高倉を訪ねている。

米太郎の調査研究の成果は逐次展示会や孔版の冊子で発表された模様である。我々が現在見ることができるのは1935（昭和10）年3月刊の『郷土先史民族砕趾其他（一）』であるが、この書には「研究發表第四編」とあり、また1938（昭和13）年4月刊の『十勝新石器遺物（一）』にも「叢刊第五輯」とあることから、調査成果を順次発表していたらしいが詳細は不明である。

『郷土先史民族砕趾』は、1976（昭和51）年に十勝川流域史研究会によって復刻されたが、この書の凡例には「郷土に於ける先史民族の研究は先輩の方々が各方面より御研究を続けておられますので私見を省き記述のみに致しました。冊数は同好方々のみ七部製作を致しました。帶広附近、広尾附近は行かれませんでした。日曜・土曜（大水二日の他）は全部利用しました。時間がないので詳しく述べられました」とあり、7部のみ作成されたことが明らかにされている。この7部の本は名取武光・高倉新一郎（北海道大学）、道庁史跡調査会、高橋視学（十勝支庁）らに寄贈されている。

この書の内容は十勝管内のチャシ跡の分布・概

要と浦幌町・本別町の主要遺跡出土の遺物の紹介であるが、何といつても前者にウェイトが置かれている。ここで、紹介しているチャシ数は浦幌町6、豊頃町9、芽室町1、幕別町1、本別町7、音別町1の計25基で、これらのうち豊頃町の一部を除けば、現在でもその所在は明らかであり、掲載された略図もかなり正確なものとなっている。また、本別町に所在する利別川右岸の勇足A～Dチャシ跡は現在では大きく崩落し、その原形を留めていないが、米太郎の略図によって1935年当時の各チャシ跡の様相を知ることができ、オリジナルに近い形のチャシの様子を見ることができる。

1935年当時、考古学的には極めて限られた人々によってしか語られることのなかったチャシについて、米太郎が興味を覚え、踏査を敢行したのは奉職した学校の近くに旅来チャシ・安骨チャシなど著名なチャシが所在していたこと、さらに十勝太地区にもチャシが軒を並べ、これらの合計数だけでも十勝管内の過半数を越えるチャシがあった

## 櫛目紋尖底土器を隨伴する細石器遺跡

齋藤米太郎

一 は し が き	二 文 知 と 其 の 遺 踟 調 査	三 位 置 地 型	四 附 近 の 地 名 口 碑	五 遺 物 包 含 层 と 其 の 分 布	六 遺 物 考 証	七 埼 茜	八 文 化 遺 物 に 就 て (石 器、 土 器)
櫛目紋尖底土器を隨伴する細石器遺跡	昭和九年の春、郷土史編纂から、石器時代の遺蹟調査に志し、十勝郡浦幌村のシタコロバ附近を探査中、此の地に特種な櫛目紋様を持つ尖底土器が細石器に隨伴する遺蹟を発見した。此地は野菜畠一反五畝に亘った落葉樹林で所有者飯山傳平氏の厚意により、快く探査を許され、大型石突を多數採集した。	昭和十年の夏、十勝郡大津村史編纂のため、北海道帝大に高翁司津芳を訪問し、種々御教示を戴いたが、これ	が考古學方面に研究の動機となつたもので、以後、此の發掘に非常に啓發せられたものであった。	(29)			

Fig. 1 『考古学雑誌』33-7の米太郎報文

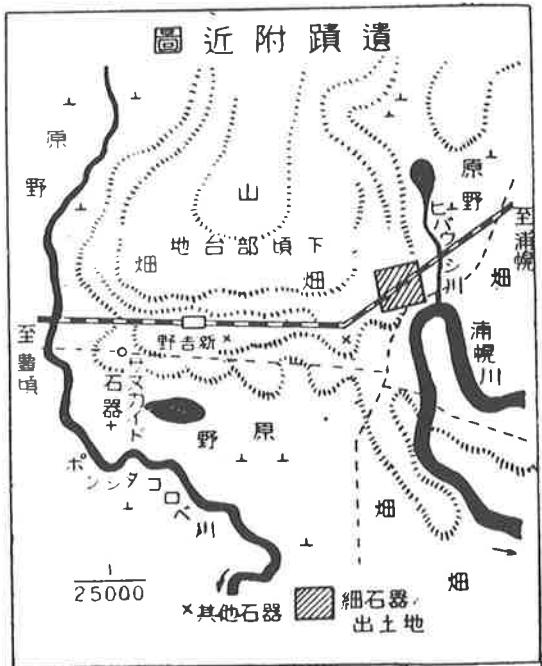


Fig. 2 浦幌新吉野台細石器遺跡付近

ことなどによる。

米太郎はこの『郷土先史民族砦趾』の姉妹編として、1936（昭和11）年には『十勝先史民族の遺趾』、1943（昭和18）年には『十勝川沿岸砦趾の研究』を上梓しているが、筆者は未見である。

また、1938（昭和13）年4月に刊行された『十勝新石器遺物（一）』は序によると「昭和十年七月静内校ニ開催ノ私主催原始文化展覧会ニ出品シタル者ノ出品物ヲ実物大ニ模写シタルモノアリマス 私ノ採集物ハ細石器以外ハ一部分ノミ発表シ以後ノ分ト共ニ第六編ニユズル」とあり、原始文化展覧会の図録のような役割をもつたものである。

この書も1981（昭和56）年、十勝川流域史研究会によって復刻されたが、内容で特に注目されるのは、1943（昭和18）年に『考古学雑誌』33-7に発表されることになる浦幌新吉野台細石器遺跡の遺物が155点掲載されていることであり、中には石刃鎌と思われるもの4点、石核・擦切磨製石斧・スクレイパー・石刃なども含まれていることである。

さて、米太郎の名を一躍有名にしたのは「櫛目紋尖底土器を隨伴する細石器遺跡」を『考古学雑誌』に発表してからである。当時の考古学界の常

識として日本に細石器は存在せず、ましてや土器を伴うなどということは予想だにしなかったことだったので、大きな衝撃を与えることになった。しかし、当時は戦時中であり、また考古学界は山内清男と喜田貞吉の「ミネルヴァ論争」の真っ最中であったので長続きはせず、北海道の片田舎の一青年の報文に注意を払う者などいなかったのが実態である。

この報文に掲載された「細石器」は、『郷土先史民族砦趾』に掲載された29点の遺物を含んでいる。いずれも黒曜石製のブレード状のものであるが、『郷土先史民族砦趾』中では「細石器」と記してはいない。しかし、3年後に刊行した『十勝新石器遺物（一）』では「細石器」と明記されている。これは、大山柏の『歐州旧石器時代』や1935（昭和10）年に発表された八幡一郎の「北海道の細石器」の影響を受けたもので、これらを中石器時代の所産と位置づけている。また、この段階では土器は発見されておらず、条痕文様土器が1点掲載されているのみである。これについて、米太郎自身も「昭和16年以後は土器の採集を主として調査したが、石斧・石鎌等も発見せられ、最後に櫛目紋様の土器片が発掘せらるるに及んで、此の地は他に比較して特異な文化を持って居る事が判明したのであった」と述べ、櫛目紋様の土器の発見を機に中央誌の『考古学雑誌』に投稿したものようである。

このように『十勝新石器遺物（一）』は『考古学雑誌』発表に至る中間報告的色彩をもっているが、この中で米太郎は「細石器」を特別扱いし、他の遺物はおおよそ河川ごとにまとめている。河川ごとにまとめられた遺物は概ね次のような物である。

ウララボロ川（浦幌川）：石匕・石槍・搔器・石製裝身具・大型石槍・石斧・擦文土器

十勝川口付近：石匕・石鎌・石斧・石槍・搔器・

紡錘車・擦文土器

大津川筋：石槍・搔器・石斧・石鎌

その他：旅順・色丹島・小樽海岸出土のもの・オホツク式土器

また、「細石器」として区分されたものの中には石刃・搔器・石刃鎌・石槍・石製裝身具・磨製石斧・磨製石斧残片・石核がある。

『考古学雑誌』に掲載された「櫛目紋尖底土器

「に随伴する細石器遺跡」は1934（昭和9）～1943（昭和18）年までの約9年間の小規模発掘調査の結果をまとめたものである。現在でもこの文献は石刃鎌文化や北海道の縄文早期を語る上で欠くことのできない底本的役割をもっているが、発表当時は「細石器」の発見及び、土器との伴出という内容は容易に受け入れられないものであり、事実の確認には大きな時間を費やす結果となつた。これは相沢忠洋が岩宿遺跡を発見する4年も前のことであり、無理からぬことであったろう。

しかし、戦後急速に発展した先土器文化研究の前史となるものであり、先駆的意味合いをもつたものと数えられ、米太郎自身にとっては考古学に手を染めて最初に当った遺跡が後世まで論議をかもすことになる重要な遺跡となつた。

米太郎はこの遺跡の特異性に気付き、いずれ機会を見て大規模な発掘を考え、土地所有者の飯

山伝平と「他の誰にもこの遺跡は掘らせない」旨の念書を交わしていた（飯山伝平談）。この米太郎の夢は戦後になって名取武光との共同発掘として実現した。そして、この発掘は北海道においては網走市モヨロ貝塚に次ぐ規模と内容を持ち、地元吉野中学校や帯広柏葉高校などの協力を得て、実施されたのである。

発掘は先に発表されていた米太郎の報文の内容を確認するためであった。その結果、米太郎が尖底としていた土器は平底、櫛目文としていた文様は絡条体圧痕文であるということが判明した。この土器は後に「浦幌式土器」と命名された。この間の経過については、1950（昭和25）年7月30日に浦幌村公民館で発掘報告会をした名取武光の草稿に詳しい。ここに紹介するのは、浦幌町教育委員会に残されているものである。

## 北海道新刊

1版 (2)



(毎月1回1ヶ月(単行)600円+1回2回1円500円)



## 吉野台地 史跡に申請続ける斎藤さん

# 土石器と取くる十五年

（本文は、1950年7月30日付の「浦幌町教育委員会」に提出された名取武光の草稿を基にしたものです。）

Fig. 3 発掘当時の新聞記事



Fig. 4 報告会を報道する新聞

## 吉野台の細石器発掘

名取 武光

浦幌村の篤農家飯山伝平さんの裏山に当る吉野台からは、細石器と呼ばれる特殊な石器と土器とが同じ地層から発掘されることが、篤学者斎藤米太郎さんによって昭和9年に発見され、同16年（筆者注）に学界に発表されていた。この種の遺跡は現在日本に一つしかないので、これを充分に調査したうえ北海道の史跡として指定し、貴重な文化財として保護を加えようという計画が、今年の3月に道教委の史跡調査委員会で決定され、浦幌村の村長さんを始め皆様の御協力によって、7月14日から15日間の発掘調査が進められる運びになった。吉野中学、浦幌中、小学校、帯広柏葉高校生などの熱心な協力によって、24日現在までに72坪を層位的に調査し、約3千5

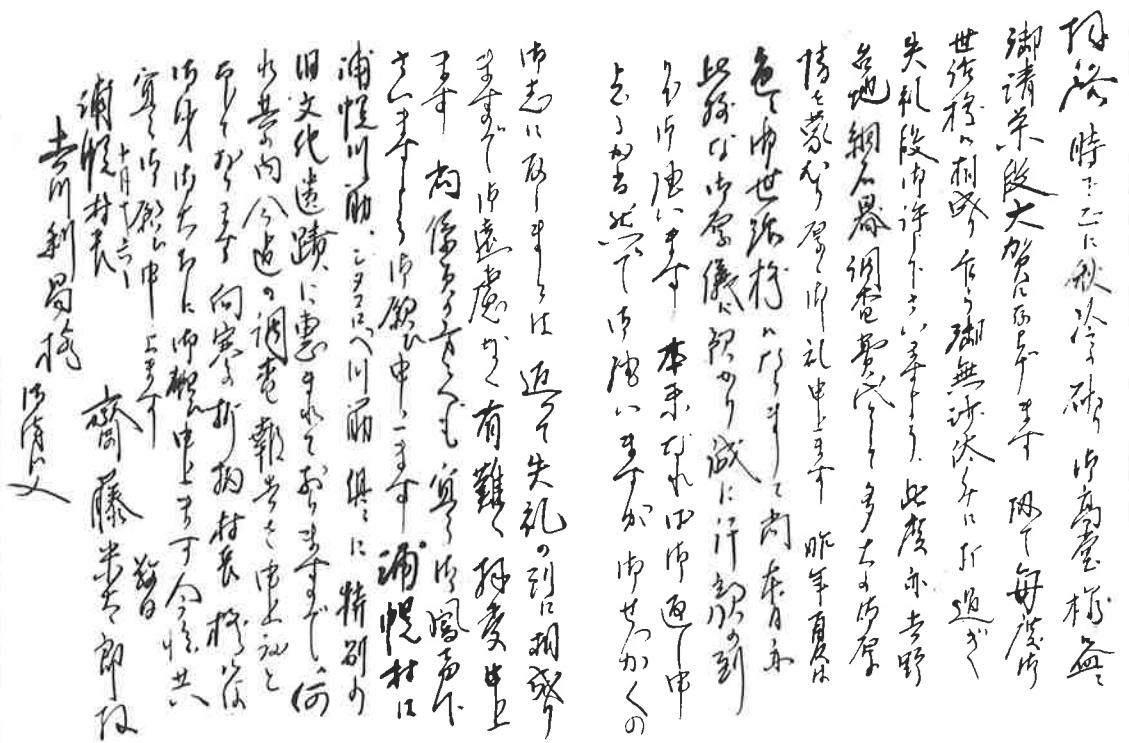


Fig. 5 斎藤米太郎から浦幌村長への礼状

百点の遺物を得た。その中には今までこの遺跡から発見されたことのない、美事に加工した石製の耳環があり、又地下1米30厘の地層まで掘りこんだ楕円形の遺跡が二ヶ所に発見され、多数の細石器や土器がその中から掘り出された。これはその当時の人の墳墓であったに相違ない。

こん度の発掘の結果、特に注目したいことは、細石器を伴出する土器が特殊な型式であることである。考古学では特殊な型式の土器が発見されると、その他名をとつてその型式の土器の呼び名とする慣例になつておる、例えば東京の本郷弥生町で初めて発見されたものを弥生式土器と呼んでいるが、吉野台の土器を今後浦幌式と呼びたいと思う。浦幌式の口縁部に連続並列して施された型押文はかつて櫛目紋であると学界に報告され、学界でもその実物に接する機会がなかつたのでそのまま信じられていたのであるが、14日以来この種の土器を多数発掘して詳細に調べた結果、櫛目紋であるというのは誤りで実は廻転式の撚糸紋であることが明瞭になった。尚地元の有志の方々の御意図で、今度発掘した遺物は北海道大学に保管することになったので今後は広く浦幌村吉野台の遺物が紹介され学界に貢献することが出来るのは嬉しいことである。それに伴つて吉野台遺跡の重要性が益々広く認識されるようになるが、それにつけても貴重な文化財である吉野台を郷土の皆様と共に充分保護するように致したいものである。

(24日稿)

名取武光は、この調査結果について1960(昭和35)年になって住吉町式と関連ありとみて縄文早期に位置付けた(名取、1960)。

しかし、他の研究者は冷淡で例え吉崎昌一(1956)が「新吉野の遺跡のブレードは石器の性質からみて、縄文文化の仲間とは考えられない」とか、児玉作左衛門・大場利夫(1958)が「むしろ縄文文化に接近した年代に、本文化が形成されたものであろうという事実に留めるべきである」とう考えを明らかにしている。

その後の調査研究活動については周知のとおりであるが、本遺跡の報告は断片的なものが多く全

容が未だ知られることは不幸なことである。その中で、本遺跡の出土品がわずかでも図示されたのは、次に掲げる文献のみである。なお、ここには表面採集の資料も含まれている。

- 林 欽吾(1953)「日本北辺の古文化と種族」『ロシア人日本遠訪記附篇』 東京
- 名取武光(1960)「道指定浦幌新吉野台細石器遺跡」『北海道文化財シリーズ』2 札幌
- 大場利夫(1962)「埋蔵文化財」『北海道文化財シリーズ』4 札幌
- 斎藤武一・有沢一則・岩谷朝吉・松下亘(1966)『富良野東山—北海道富良野町の石刃鍔文化の遺跡—』 富良野
- 木村英明(1972)「北海道先土器時代文化終焉に関する理解」『古代文化』19—2 京都
- 後藤秀彦・佐藤訓敏(1975)「浦幌新吉野台細石器遺跡出土の遺物」『浦幌町郷土博物館報告』6 浦幌
- 佐藤一夫(1975)「先史時代」『苫小牧市史』 苫小牧
- 木村英明(1976)「石刃鍔文化について」『江上波夫教授古稀記念論集』考古・美術篇

こうしてみると、米太郎自身の手になるものがないのは残念である。米太郎がこの名取武光との調査をどのように考えていたのか知る由もないが浦幌町教育委員会あての米太郎からの札状には「浦幌村は浦幌川筋、シタコロベ川筋併々に特別の旧文化遺跡に恵まれておりますので何れ其の内今迄の調査報告を申上度と存じております」と、あり、他の遺跡も含めて報告の用意があったようである(Fig. 5)。

1950(昭和25)年以後の米太郎には目だった業績はない。浦幌式土器について名取武光とともに日本人類学会日本民族学協会連合会での研究発表のほか、晩年になって『北海道考古学』の第1・2・4輯に帯広市周辺の遺跡について略報しているのみである。

このうち、第2輯に発表した「幕別遺跡調査略報」中の図示された土器(米太郎は「南勢式土器と呼んでいる)は初期の後北式土器であり、十勝地域では今もって類例の発見はない。畠宏明らは

この土器を江別A式土器としている（畠ほか、1966）。

そして、この『北海道考古学』第4輯に執筆した「土製管玉遺跡について」が絶筆となった。

しかし、この間も考古学界とのパイプはつながっており、1965（昭和40）年に行われた東京大学理学部人類学教室（渡辺仁）の浦幌町十勝太遺跡の調査の折りも、地教育委員会との仲介の労をとっている。この調査は擦文文化の竪穴式住居跡を2基完掘したもので、そのうちの1基には壁に沿ってプラットホーム状のベンチがあり、現在では類例が増えているが、当時としては最初の発見であった。

また、出土した擦文土器は宇田川洋によって後期に分類されている（宇田川、1977・1979）。

筆者らは、1975（昭和50）年、米太郎の発見した浦幌式土器を求めて、共栄B遺跡の発掘調査を行った。米太郎らが調査した浦幌新吉野台細石器遺跡の北東450mの箇所である。遺跡は本遺跡と同様に標高20m前後の新吉野Ⅰ面上に所在し、発掘地は裸地となっていた。調査の結果、この共栄B遺跡からは住居跡2基、土壙19基、焼土2基が発見され、目的の浦幌式土器も復元完形品だけでも8個体が検出された。

この浦幌式土器を子細に吟味してみると、タイプサイトの浦幌式土器の施文とは異なり、釧路市東釧路遺跡第Ⅱ地点出土の浦幌式土器により近い様相を示していたことから、タイプサイトと共栄B遺跡では若干の時間差があったものと推測されている。このような石刃鍛文化内の階梯の存在は既に識者によって指摘されていたところであるが、土器の文様等によって、階梯が明かになったのは本遺跡が初めてである。

石刃鍛文化の遺跡の調査は共栄B遺跡の直後に標茶町で行われ、その後湧別町や富良野市でも精力的に実施されているが、本遺跡のように土器の豊富な遺跡は稀であり、縄文早期あるいは石刃鍛文化の研究を進める上で避けて通れない重要な遺跡となっている。今日、石刃鍛文化の前段に位置すると考えられるテンネル式や暁式土器の存在が問題となっているが、これらの土器自身あるいは伴出する石器の吟味がこれからの課題であろう。

石刃鍛文化の研究に火を着けた米太郎の功績は永遠であるが、これを更に発展させることが米太

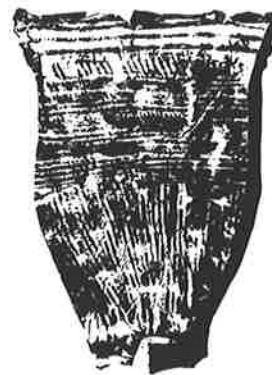


Fig. 6  
南勢式土器

郎始め先覚者への、我々の欠くことのできない任務であろう。

以上の一連の考古学的業績が認められ、1954（昭和29）年北海道文化奨励賞、1957（昭和32）年帯広市文化賞を受賞し、1968（昭和43）年12月10日逝去した。  
(浦幌町郷土博物館学芸員)

#### 引用文献

- 宇田川洋（1977）「擦文期」『北海道史研究』13  
札幌  
宇田川洋（1979）「70年代擦文文化の研究」『ど  
るめん』22 東京  
児玉作左衛門・大場利夫（1958）「湧別遺跡の發  
掘について—石刃鍛を伴うブレード文化  
遺跡—」『北方文化研究報告』13 札幌  
名取武光（1960）「浦幌新吉野台細石器遺跡」『北  
海道文化財』2 札幌  
畠宏明ほか（1966）「十勝地方の遺跡と遺物」『郷  
土の科学』51・52合併号 札幌  
吉崎昌一（1956）「北海道北見国相内村豊田遺跡  
略報」『石器時代』1 東京

1989年1月20日	印 刷
1989年1月30日	發 行
編 集 後 藤 秀 彦	
発行責任者 木 村 旭	
發 行 所 浦幌町郷土博物館 (089-56)	
北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地の1	
印 刷 所 大同出版紙業株式会社 (080)	
北海道帯広市西7条南6丁目	